

## 「琵琶湖」の名前

琵琶湖の名前は、湖の歴史に比べて新しく、16世紀初頭が最初で、広く知られるようになったのは今から320年前である。それまでは近淡海、淡海、水海、湖などと呼ばれていた。名前は湖上に浮かぶ竹生島にまつられている弁才天に典拠。弁才天がもつ楽器の琵琶が湖の形状に似ていることに由来する。それと琵琶が奏でる音色と湖水のさざ波と相似していたことも密接な関係がある。

琵琶湖の誕生は古く今から400万年前、そしておおよそ現在地に定まったのは約40万年前といわれ、世界有数の古代湖である。その悠久の歴史に比べて琵琶湖の名称が、一般に知られるようになったのは、今から約320年以降と非常にあたらしい。

当初から琵琶湖と呼ばれていたのではなく、最初「琵琶の形に似たり」という字句が文献『深嵐拾葉集』に登場したのは14世紀初頭のことである。それまでは琵琶湖のことを近淡海・淡海、水海、湖、近江の海、細波、鳩の海などと呼ばれていた。

湖の名前が琵琶に典拠するのは、湖上に浮かぶ竹生島にまつられた弁才天である。弁才天はもとインドのヒンドゥー教に登場するサラスパティーという女神で、弁才天・妙音天・美音天などと漢訳されている。弁才天は楽器琵琶をもつ二臂琵琶弾奏像で水を守る神、仏法を守る神としてインド、中国を経て奈良時代に伝教伝来とともに、日本に導入されたのである。

弁才天の持つ琵琶が、どうして湖の形状に似ているといわれるようになったのであろうか。前出の『深嵐拾葉集』の編述者は、比叡山延暦寺の学僧光宗であるが、おそらく眼下に広がる湖を日々眺望して、楽器琵琶から湖の形状を観想をしたに違いない。上空から見ることのできない時代に、驚くべき洞察力といえるだろう。また『同書』には弁才天は湖とともに比叡山を守る神として位置付けられている。

ところで、固有名詞の琵琶湖が、はじめて文献に登場するのは室町時代後期いわゆる16世紀初頭までさがる。それは京都の詩僧景徐周麟が湖を訪れ、漢詩集「湖上八景」にみることができる。

そして、琵琶湖の名前が広く使われたのは、さらに年代がくんだり、1689(元禄2)年著名な儒学者貝原益軒の日記である。これには琵琶湖全体の地形を綴り、最後に「故に琵琶湖と云う」と記している。これ以降琵琶湖の名称は文学作品、浮世絵版画、地図などに使われ、すでに定着したことを物語っている。

もう一つ注目すべきは、湖の形状とともに楽器琵琶の発する音色との関係だろう。

湖の枕詞にさざ波、細波、小波の字句がある。琵琶の奏でる音色と、湖辺に打ち寄せる湖水の発する音に相似点があるように考えられる。弁才天には妙音・美音天の異称があることから関係付けられよう。

ちなみに、管見の限りであるが世界の湖の呼称のなかで琵琶湖のように楽器にちなんだ湖は、イスラエルのキネレット湖だけで、湖名は琴(キンノール)が語源になっている。地元では湖水の波の音が、琴をかき鳴らす音に似ていることに由来しているといわれている。

これからも湖の形状とともに琵琶の奏でる音色と湖水のさざ波が相似していることも、名前の由来に密接な関係があると考えられる。私たちは美しい風景とともに情感を与えてくれる琵琶湖をいつもでもたいせつに守り伝えたいものだ。



写真1-1-1  
絹本着色弁才天像  
(宝厳寺蔵)

木村 至宏